

島尾敏雄非小説集成6

島尾敏雄
小説集成

冬樹社



鳥尾敏雄非小説集成（全六巻）

第六巻 文学篇Ⅲ

昭和四十八年十月五月初版第一刷発行

昭和五十二年九月五月初版第二刷発行

著 者 鳥尾敏雄

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町二の十八 二101

電話〇三（二六四）〇三四六 振替東京八七七五七

印刷所 本文・稲葉印刷株式会社

平版・創美

製本所 一重製本株式会社

装幀者 秋山法子

©Toshio Shimao 1973 0395-00406-5190

第六卷
目次

文学篇Ⅲ

はじめての経験……………	九
繋りを待ちつつ……………	二
交遊抄……………	一七
書物と古本屋と図書館と……………	一九
南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和四十年度)……………	二
いやな先生……………	三
「地方文学」ということに就いて……………	三五
書庫に憑かれて……………	元
「徳之島航海記」作成の経緯……………	三〇
小高根二郎著「詩人——その生涯と運命」……………	三
「田中英光全集」第七巻を読んで……………	三
震洋隊の旧部下たち……………	三
二十年目の八月十五日……………	四
或る部下の事……………	四
一冊の本……………	四
教訓的な感想……………	五
「日のちぢまり」後記……………	五
南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和四十一年度)……………	七

ブルースト知らず	五九
シンポジウム発言草稿	六一
このごろ	六三
文芸時評	六四
一病息災	六六
「私の文学遍歴」後書	七八
私の人生を決めた一冊の本	七八
「贗学生」が書けたころ	八〇
名著発掘	八三
「島にて」後書	八五
むかしの部下	八六
八月十五日	八九
詩人の存在	九二
私のおすすめしたい本	九四
長谷川四郎著「模範兵隊小説集」	九五
「豊島与志雄著作集」第五卷	九七
私の感銘した本	一〇五
南日本新聞・新春短篇小説選評（昭和四十二年度）	一〇六
どうして小説を私は書くか	一〇七

第一期魚雷艇学生……………	二三
上野英信著「地の底の笑い話」……………	二六
特攻隊員の生活……………	三〇
「幼年記」解説……………	三三
私の内部に残る断片……………	三六
南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和四十二年度)……………	四二
人生の本……………	四三
伊東静雄との通交……………	四三
詩人たち……………	四六
「日を繋げて」後記……………	四六
君仙子先生の句集によせて……………	四七
或る光景……………	四六
中村地平さんのこと……………	四七
二枚橋……………	四七
選ぶことの鬱屈……………	四七
わたしの文章作法……………	四八
石橋理著「永遠の常識」……………	四八
ドストイェフスキイ知らず……………	四七
出水の縁……………	四八

庄野潤三著「前途」	一九二
南日本新聞・新春短篇小説選評（昭和四十四年度）	一九三
「琉球弧の視点から」後書	一九四
妻と犬	一九五
盗み足で近づくもの	一九六
螺旋回転	二〇一
プレス・ビブリオオマール本「帰巢者の憂鬱」への 添え書	二〇二
南日本新聞・新春短篇小説選評（昭和四十五年度）	二〇三
日々のたたかい	二〇五
狭い体験、静かな風景	二〇六
幻の友	二一一
事 故	二二三
不安な現代の状況	二二四
「東北と奄美の昔ばなし」はしがき	二三三
特攻兵器・震洋と私	二三四
南日本新聞・新春短篇小説選評（昭和四十六年度）	二三六
安岡章太郎との通交	二三七
詩人のへだたり	二三〇

幼時体験……………	二二三
吉行淳之介のこと……………	二二五
中蘭英助のこと……………	二二六
宮崎の中村地平さん……………	二二七
ク　　マ……………	二二〇
わたしの城……………	二二三
解　　題……………	二四三
年　　譜……………	二五三

文学篇Ⅲ

はじめての経験

——最も印象に残った批評

昭和二十九年正月号の「近代文学」に奥野健男が「島尾敏雄論」を書いた。それは私に強い印象を与えた。自分の小説を以て作家論の対象になりたいと願望はしても、なり得ると考えることは困難だった。その数から言ってもそのころ私は四十に足りない短篇とただ一つの長篇しかなかった。もっとも数の問題ではなく、自分がなにかを表現するため力をこころよく出しつくした感受をひそかに持つことにも恵まれてはいなかった。書きたい主題がつかめていたわけではないから、いっそう氣持をくすばらせていたようなときだ。

はじめ彼が私について作家論を書きたいと言ったとき、たぶん、よした方がいいのじゃないだろうかと思ふ。これは正確な返事ではないが、そのとき私には彼の意向を受けとめるだけの用意はなかった。まずはじめに考えたことは、文芸批評家として出発する時期に評価の定まらない者の作家論などを書く、あとで、彼はやりにくくなるだろうに、ということだ。対象の軽さと共に彼の仕事も軽さにつきまとわれるはずだ。結果は賭か予言に似てくるだろうし、それは危険なことだ。私の小説の世界は世間の中に賛成されるにも反対されるにもどれほどもしみこんだ重さを持つてはいなかったから、それについて何を言うにしてもひびき応ずる手ごたえの感じられない中で仕事を進めねばならず、その結果彼の筆つきに空転が起るだろう、と考え、またなぜ

か羞恥の気持もあったからだ。

しかし発表されたそれを読んだとき、いろいろの感慨の彼方で、彼が私の仕事に手を添えてくれたことを感じ、それは喜び以外のなにものでもなかった。そこに描きだされた小説家の肖像は、私というよりは奥野健男のものがたりの中に誕生したそのように思うが、私にとってはその第二の「私」によって世間との交通のいとぐちを与えられたことになった。私はその翌年の三十年に星加輝光の「島尾敏雄論」を、三十二年と三十三年に竹之内道博と黒田敏嗣のそれぞれの「島尾敏雄論」を読み、その四つの論文がすべて、その時期に、わずか限られた人々だけの読む文芸同人雑誌に発表されたことに、将来を勇気づけられてきたところがあると思う。もっとも、自分に関わる論文の要旨を冷静につかみとるためには、五年とか十年後の読みかえしが必要ではないか。そうすると発表直後にあわてて読んでたとえば血がのぼるほどの言葉をみつけても、歳月を経たあとの読みかえしで別の顔つきを示してくることがおかしいわけだ。それを実行することは読書のたのしみとも言える。私自身の仕事の苦渋のことはひとまず棚あげにしておかなければならないが、奥野は「島尾敏雄論」を書いたあとで、十年後にもう一度それを書くと言った。私はあとで後悔するのに、思ったが、十年目の三十八年三月号の「文学界」に彼は「島尾敏雄の文学と夢」を書いた。

繋りを待ちつつ

もの忘れをしないようにと思うことが、今のところせいっぱいの努力だ。もちろんなにひとつ忘れることがないなどということが出来るものでもないが、自分のしたことだけでも、あとで思いだせる仕組みを、しっかりとぎっていたい。それができたら、つりあいを保っていることができる。それは生きているうちのすべての行いが、その場だけのものでなく、あとさきのつながりを持っているように思えてならないからだ。あとさきの、というよりも、なにかひとつの行いは、いつかあとになって、それがいつかをあらかじめ見当をつけることはできないけれど、その意味があらわれて実を結ぶようなことだ。そう思われるようなことが多くなった。まえにはどうして気づかなかったかわからない。それだけ、生活を数多く重ねてきたわけなのか、まえの行いをどうしても思い起こさなければならぬことに出くわすことがしばしばだ。そのとき思い出すことに失敗すれば、つりあいを失って、ところがいらつき寂しい気持ちに引きずりこまれる。暗くて底のしれない穴のそばに立っている自分の足もとが、まざまざ意識されるふうだ。目のまわりが軽く熱をもち、眼鏡のふちの輪がはりついてとれない気持ちになるのはそのときだ。周囲の景色が不たしかな、ぼんやりしたものになり、物のかたちのふちのところが二重にあやもつれしてくる。目がまわりのものからさえぎられ、孤独な余生の境涯にはいり、死が、声をかければすぐふり向いてくれるところまで来て

しまったのか。赤い幕が、どこか上の方からじりじり下がってきて、やがてその裾が地面にとどき、私はとじこめられて、のがれられなくなるのかもしれない。以前とて変りはないと思いたいが、次第に視野はせばめられてくる。自分がどんなところに立っているのか、いっそうまぎらわしくなった。そして、ひとつめかけける周囲の層のあちこちに欠落の部分のできたことが感じられる。まえばわからぬなりに、層は一面に等質の厚みがあつて、てごたえある弾力をからだに伝えてきた。理解できぬ暗い層にむかい、手足をつっぱっているだけで、私にはなにか実体のたしかめが伝わってきた。そのたしかめだけで、実体がなにあるかを、それほど知る努力をしないですんだ。しかしこのごろはなんだかちがつてきたと思えて仕方がない。手足に伝わってくる手答えがうすくなつてしまった。等質のものではなく、その背後のどこか、暗い層の奥の方のどこかに生じてきた空白の欠けた部分が感じられる。手答えはそのむなしさがひびいてくるふうだ。しかし根拠のないむなしさを感じずるだけで、それがなにあるかはわからない。そのところが、理解の終ったほかの部分と結びつかない。もしかしたら、それは、「わからない」のではなく、「忘れた」のではないかとふと思つたとき、或るおそろしきにおそわれた。そのときたしかに意識していたか、たとえ無意識に近かつたとしてもそのとき指し示されれば理解できたにちがいないのに、そのときからしばらく時のたつたあとでは、そこだけぼつんと切りはなされていてそのまわりのものと結びつかず、それがなんだか意味がつかめない。つまり私の頭の中では白くそりかえっているとしたか感じられない。自分の確かめが、そこにつき当ると、たよりなくよろけてしまつて、方向までわからなくなつてしまふ。そのわずかな欠落の場所のために、自分の行為がどこからやってくるどこに行こうとしていたのか見通せないとなると、すべてが徒勞だつたということにならないか。それはどうしても思い出さなけ

ればならぬ。いきをひそめ、くらやみに目をこらし、記憶のもどってくるのを待ち受けなければいけない。あぶりだしのように、いったん沈まった忘却の作用がその効果を失い、反対に記憶が浮き上ってくるのを待たなければならぬ。それはひとつの苦行と言ってもいい。頭脳のどこかがしびれてしまい、無理にはたらかせようとすると、つかまえてころのない痛み、痛みとも言えぬしびれ、皺のかたまりの脳のどこかがくさってしまっただけのような、だるい感触が身うちに広がってくる。それはまたなにかの酔いとなって、片方から片方に落ちこむようにまわる地球の自転を反映させはじめる。ぐんぐん下方にかたむいて行くが、すっかりまわりきらぬうちに、反対の運動の波が押しかえしてきて、どちらに加担してよいかとまどい、そのとまどいが嘔きけを引きだしてくる。おちつかなければならぬ、と自分に言いきかせ、早くそこをところを理解で覆って、つじつまを合わせたいと思う。急ぐことはないのだから、おちついて、端緒のところからはじめよう。一步もステップを省略しないで、一步の意味をつかんでたしかめ記憶にとどめてから次の一步をふみだそう。ひとつもはぶかないでうめて行く。通ってきた場所の層が、まんべんなく等質であるように。しかしそう思う思いの下から、あたらしい欠落がついてきてしまう。欠落のところは次々に反応して拡大され、やがてひとつの爆発をひきおこすだろう。そして私はこなごなになって宇宙のどこかにとびちって行くのだろうか。

なにはさておき、物忘れをしないことだ。目のふちの熱が広がらないうちに、腰を低くして、敵を待つのでなければ、このまっくらな世界をうかがうことはできぬ。しかしそれは絶望ではないから、しんぼう強く待つことだ。待っていれば、わからずに通りすぎたものがわかる機会がやってきて、やみの中で、あとさき、たてよこを結びつけるつながりが、白くにぶい光りを放って意味があ

らわれる。過去のどれひとつとして、むだはなく、われわれはただ待つことが要求されているのだから待つことを覚えればいい。いつも応じられる姿勢で待っていると記憶がちらちら出沒しはじめる。そうだ、ものわすれしてはいけないのだ。でも実のところどうしてこう忘れっぽくなった。時のうつろいと共に、私はどんどん忘れてしまう。周囲のくらやみの中にはいりこんでしまい、どうしても思いだせない。夢の舌とおなじに、引っこんでしまうともうふたたびつかみだすことができないと思うほどだ。ただインティメイトな肌ざわりだけ、ほのかなぬくみをのこして、すぐそばにそれはひそんでいるのに記憶の中にとりもどせない。

思いだすこと、が私のたたかい。思いだして物忘れしないこと。あとはただ待っていれば、理解の果実が生まれてくる。それでもなお私は待ち、その果実の数をふやすことを願わなければいけない。

あれはここ、これはそこ分類してそれぞれの置き場所をきめているのに、忘却におそわれると、その分類のどこにまぎれこんだかわからなくなってしまう。さしあたって、たぶんそれは必要ではないが、それがほんとうにいつまでたっても必要でないかどうかは、わからないことだ。もしかしたら、いつか必要になるときがあるのではないか。だから、その日のためにも、どうしても思いださなければならぬ。いや、それはいくらか、こじつけのように思う。本心のところは、こんなに物忘れがひどくなることは、なにかのしるしにちがいない。そのなにかには、どうしても抵抗したい。それにねじふせられて屈服してしまうのは、しのべない。だから、それがどんなに不必要なことがらでも、思いださなければ、生きて行くあかしが立たぬ。じっと息をひそませ、まるでなにもわからない周囲のやみに向かい、ひとみを光らせ、じっとうかがう姿勢をつくらなければならない。それ